

学位請求論文審査報告要旨

2018年6月13日

申請者 NGUYEN THI THANH THUY

論文題目 日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究
—ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

論文審査委員 石黒 圭
山崎 誠
五味 政信

1. 本論文の内容と構成

日本語のオノマトペは感覚・感情の伝達に優れた表現であり、小説や童話などの文学作品のみならず、会話や SNS など、日常的な言語生活においても欠かせない語群である。

オノマトペの使用は感覚に依拠しているため、日本語学習者にとって難しい学習項目の一つである。しかし、近年の食感オノマトペやスポーツ・オノマトペの隆盛に比して、オノマトペを日本語学習者がどのように習得しているか、日本語教育の教室でどのように教えたらいいかといった研究はこれまで少なく、今後の研究が俟たれている分野であった。ことに、日本語学習者の習得実態のこれまでの調査は、中国語を母語とする日本語学習者に極端に偏っており、他の言語を母語とする学習者の調査はきわめて少ないという現状があった。

本論文は、学習者数が近年急速に増えているベトナム語を母語とする日本語学習者に焦点を当てた研究であり、比較の対象は中国語を母語とする日本語学習者である。オノマトペの使用が少ない中国語とは異なり、日本語と同様にオノマトペ使用の豊富なベトナム語を母語とした場合、その習得実態は自ずと異なると予想され、こうした調査は、ベトナム語話者の日本語学習者にとどまらず、今後、オノマトペ使用の豊富な別の言語を母語とする学習者の習得支援にも役立つことが期待される。

本論文は、全 10 章から構成される。その構成は以下の通りである。

第 1 章 はじめに

1.1 研究背景

1.2 本研究における研究課題

1.3 論文の構成

第 2 章 日本語オノマトペの概要及び本研究の日本語オノマトペの判定基準

2.1 日本語オノマトペの定義と多様な名称

- 2.2 日本語オノマトペの形態的特徴
- 2.3 日本語オノマトペの用法
- 2.4 日本語オノマトペの語彙性とオノマトペ度
- 2.5 日本語オノマトペの「語彙化」と「境界オノマトペ」
- 2.6 日本語オノマトペの音象徴性
- 2.7 日本語オノマトペの判定基準
- 第3章 ベトナム語オノマトペ及び中国語オノマトペの概要
 - 3.1 ベトナム語オノマトペの概要
 - 3.2 中国語オノマトペの概要
 - 3.3 第3章のまとめ
- 第4章 先行研究の概観と本研究の位置づけ
 - 4.1 日本語オノマトペの指導に関する先行研究
 - 4.2 日本語オノマトペの学習に関する先行研究
 - 4.3 先行研究の問題点と本研究の位置づけ
- 第5章 本研究における調査の概要
 - 5.1 調査対象とした21語のオノマトペの選定に至る経緯
 - 5.2 調査対象の21語のオノマトペとそれを再生するアニメーション
 - 5.3 調査協力者
 - 5.4 調査の手順
- 第6章 アンケート調査の結果
 - 6.1 両国の学習者のアンケート調査の結果
 - 6.2 両国の学習者による日本語オノマトペについての学習意識
 - 6.3 学習者の日本語オノマトペの学習方法
- 第7章 ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの正答率
 - 7.1 日本語母語話者の回答及び本研究における正答の判断基準について
 - 7.2 ベトナム人学習者による日本語オノマトペの正答率
 - 7.3 中国人学習者による日本語オノマトペの正答率
 - 7.4 第7章のまとめ
- 第8章 ベトナム人学習者と中国人学習者の日本語オノマトペの産出に見られる傾向及び各母語の転移
 - 8.1 ベトナム人学習者による日本語オノマトペの産出に見られる傾向と母語の転移
 - 8.2 中国人学習者による日本語オノマトペの産出に見られる傾向と母語の転移
 - 8.3 第8章のまとめ
- 第9章 ベトナム人学習者と中国人学習者による各母語での描写
 - 9.1 ベトナム人学習者によるベトナム語でのオノマトペの描写
 - 9.2 中国人学習者による中国語での描写

9.3 第9章のまとめ

第10章 おわりに

10.1 まとめ

10.2 今後の課題

参考文献

2. 本論文の概要

本論文は、ベトナム語・中国語を母語とする学習者を対象に、日本語のオノマトペの使用実態・産出方法および学習意識・学習方法を調査したものである。また、母語による影響を知るために、両学習者に対し、母語でのオノマトペの使用実態についても調査を行っている。母語にオノマトペが豊富な言語とそうではない言語を母語とする学習者を対象に、母語におけるオノマトペの使用実態も調査し、日本語オノマトペの使用実態への母語の影響も検討するという点で、従来にない独創性を備えている。以下、本論文の章立てにしたがい、各章の概要を順に紹介する。

第1章「はじめに」では、先述した4つの研究課題の設定背景と本研究の章立てについて述べられる。現在、日本語教育におけるオノマトペの習得研究は、中国語を母語とする学習者を対象にしたものが圧倒的に多い。しかし、中国語は、オノマトペの使用が日本語と比べて限定的な言語である。世界の言語にはオノマトペが豊富な言語とそうではない言語があるため、学習者による日本語オノマトペの習得状況を調べるためには、オノマトペが豊富な言語とそうではない言語、その双方を母語とする学習者を調査対象者にし、比較する必要がある。そこで本研究では、オノマトペ使用の豊富な言語としてベトナム語が取り上げられ、①ベトナム語を母語とする学習者（以下、ベトナム語話者）と中国語を母語とする学習者（以下、中国語話者）の日本語オノマトペに対する学習意識と学習方法の違い、②日本語オノマトペの使用実態の違い、③当該のオノマトペが未知の場合の産出傾向の違い、④母語である両言語の影響の違いという四つが研究課題として立てられる。

第2章「日本語オノマトペの概要及び本研究の日本語オノマトペの判定基準」では、日本語のオノマトペの研究が概観され、本研究で扱うオノマトペの判定基準について示される。具体的には、オノマトペの定義が示されたあと、形態的な特徴、統語的な特徴、語彙性、オノマトペ度、オノマトペの語彙化、ほかの語との境界、音象徴性についての先行研究を概観したうえで、オノマトペ辞典と日本語教師の判断の二つを柱とした、本研究におけるオノマトペの判定基準が示される。

第3章「ベトナム語オノマトペ及び中国語オノマトペの概要」では、両言語話者の母語のオノマトペの特徴が紹介される。ベトナム語および中国語におけるオノマトペについて基本的なイメージを読者が持てるように、ベトナム語と中国語におけるオノマトペに相当すると思われる語群の定義、形態的特徴、統語的特徴、音象徴性という角度から、ベトナム語・中国語両言語における先行研究が概観される。

第4章「先行研究の概観と本研究の位置づけ」では、日本語オノマトペの「教育」は「学習」と「指導」の両輪により成り立つという本研究の立場が示され、「オノマトペ指導」と「オノマトペ学習」の先行研究を概観した結果、オノマトペが日本語教科書や日本語教室できちんと教えられていない現状があること、オノマトペの習得研究が中国語話者に偏り、オノマトペを豊富に有する言語を母語とする学習者の習得研究がなおざりにされていることなどの問題点が指摘され、そうした空隙を埋める本研究の意義が示される。

第5章「本研究における調査の概要」では、本研究における調査の材料となった21語のオノマトペに絞りこんだ手続き、調査の方法、調査協力者について述べられる。本論文では、ベトナム語話者と中国語話者が、日本語のオノマトペに対してどのような意識を持っているか、どのような方法で学習しているかをアンケート調査により明らかにしたうえで、日本の言語生活で頻出する21語のオノマトペを再生する独自に制作したアニメーションを調査材料とし、ベトナム語話者と中国語話者が日本語オノマトペをどの程度適切に使用できているか、未知のオノマトペをどのように産出しているかを検討すると同時に、同じ調査材料を用い、学習者の母語で描写してもらうことにより、ベトナム語と中国語それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態も調査し、それが日本語オノマトペの使用実態にどのように影響しているかということの考察も行うことが示される。

第6章「アンケート調査の結果」では、ベトナム語話者と中国語話者のアンケート調査に基づく内容が示される。調査の結果、ベトナム語話者のほうが、中国語話者より日本語オノマトペに興味を抱き、母語でオノマトペを使う習慣がある学習者の割合も、ベトナム語話者のほうが中国語話者よりはるかに高いことが明らかにされ、さらに、日本人と話すときに、ベトナム語話者のほうが、中国語話者より日本語オノマトペを積極的に使おうとする意欲が高いことも示される。日本語オノマトペの学習方法については、ベトナム語話者の63.8%は日本語オノマトペを学習する際に、母語と対応させて覚えているのに対し、中国語話者ではこの方法を採用している者が15.0%にとどまり、中国語話者による日本語オノマトペの学習では、母語における対応語の役割が弱いことが示される。本章の考察により、中国語話者よりもベトナム語話者のほうが日本語オノマトペに対する興味を持ち、日本語オノマトペの学習に母語が有利に働いている様子が窺えたとしている。

第7章「ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの正答率」では、21語それぞれのシーンにおいて、日本語話者の回答をもとに越中両言語話者のオノマトペの正答率が示される。中国語話者学部3年生グループの平均正答率が27.9%であるのに対し、ベトナム語話者学部3年生グループの正答率が55.1%と高いことから、ベトナム語では日本語のオノマトペの対応語が多く存在し、ベトナム語話者が日本語オノマトペの学習において強みを持っていることの表れであるとされる。ベトナム語話者だけの正答率を見ると、平均正答率が「留学生グループ」>「学部3年生グループ」>「学部2年生グループ」>「学部1年生グループ」の順となっており、日本語能力が高ければ高いほど日本語オノマトペをよく使用できていることが示唆される。正答率が高いのは、日本語教科書に

取り上げられている、使い方がはっきりしているオノマトペであり、学習者が十分に習得できていることが窺える一方、正答率が高くないオノマトペは、それがオノマトペと認識されにくいものや、学習者の母語に対応する語が考えにくいものであったとされる。全体的に見ると、ベトナム語話者のほうが中国語話者より日本語オノマトペを適切に使用できていることが示唆されるが、これはベトナム語話者と中国語話者の母語におけるオノマトペの使用実態と日本語オノマトペに対する学習意識の違いによるものと推察されている。

第8章「ベトナム人学習者と中国人学習者の日本語オノマトペの産出に見られる傾向及び各母語の転移」では、考察対象として正答以外の回答に焦点を当て、学習者が産出した語にどのような傾向が見られるかが考察され、また、フォローアップ・インタビューとそれぞれの母語での描写内容を参考にしながら、それぞれの母語の転移についても検討される。全体的に見ると、両言語話者が産出した語の中で、**ABAB**型の語が圧倒的に多かったという。これは、両言語話者にとって、日本語のオノマトペは、**ABAB**という反復形が基本だというイメージが強いことを意味している。一方、母語での言い方に依存している姿はベトナム語話者のほうに顕著に見られ、「物事の状態を擬音的に捉えオノマトペを産出する」という傾向は両者に共通して見られたが、ベトナム語話者は母語での言い方を想定し、それを翻訳してオノマトペを産出する傾向が強いことが明らかにされている。

第9章「ベトナム人学習者と中国人学習者による各母語での描写」では、両言語話者の母語であるベトナム語と中国語による描写内容が考察される。ベトナム語話者と中国語話者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向との関連性を見るため、両学習者が使用しているベトナム語・中国語で、オノマトペがどの程度使われているか、日本語のオノマトペに意味が対応している語がどのくらいあるか、それぞれの母語話者間の回答一致率がどのくらいあるかといった視点から分析を行っている。その結果、同じシーンにおいて、ベトナム語話者と日本語話者は母語でオノマトペを積極的に使用し描写しているのに対して、中国語話者は中国語でオノマトペをあまり使っておらず、オノマトペの代わりに、一般の動詞や形容詞を使用し描写していることが明らかにされている。これは、中国語にはオノマトペが少なく、とくに擬態語がほとんど見られないことと、動詞や形容詞、またその組み合わせによって物事の状態を細かく描写することができることによると思われる。回答一致率を見ると、ベトナム語話者の回答一致率は61.0%で、日本語話者の72.4%に比べてさほどの差がないのに対し、中国語話者の回答一致率は26.9%で低かった。これは、同じ場面において、日本語話者とベトナム語話者が中国語話者に比べ、より共通の感覚を持っていることを示唆している。さらに、学習者の回答の中で、日本語オノマトペと意味が対応している語の割合を見ると、ベトナム語は81.7%で、中国語は60.7%であったという。成人型の外国語の学習には、目標言語と母語の間に対応している部分が多ければ多いほど上達に有利であると言われているが、上記のような結果から、日本語オノマトペの学習において、ベトナム語話者は中国語話者より有利であると言えるとされている。

第10章「おわりに」では、各章の内容をまとめたうえで、最初に述べた四つの研究課題の解決につながる第6章から第9章までの成果を生かし、日本語オノマトペ教育に有益になると考えられる示唆が提案される一方、今後の課題についても示される。

3. 本論文の成果と問題点

日本語のオノマトペの習得研究としての本論文の成果は、大きくは次の3点にまとめられる。

第一に、日本語のオノマトペの習得研究として、オノマトペの豊富な言語であるベトナム語話者と、そうでない言語である中国語話者の比較をしたという点に独創性がある。とくにベトナム語話者の分析については、ベトナム語を母語とする経験豊富な日本語教師である筆者の背景が存分に生かされる一方、中国語話者も対象に加えたことで、母語に由来する問題と、学習者共通の問題との線引きが明確になり、先行研究に見られない研究の厚みが生まれている。

第二に、独自のオノマトペのアニメーションを作成し、日本語話者、ベトナム語話者、中国語話者に対して同じ条件で使用調査を行い、産出実態について正確に捉えることができてきている点に客観性がある。それぞれの話者の産出したオノマトペの種類と例数が明確になり、各言語話者にどのような偏りがあるか、また、どのような産出上の問題があるかが具体的な数値とともに把握できるようになっている。

第三に、目標言語である日本語のみならず、学習者自身の母語を対象とした調査を加えたことで、母語がどの程度、目標言語の使用に生かされているかがわかる点に独自性がある。これによって、日本語のオノマトペ産出における母語の転移の影響や、学習者ならではの産出のストラテジーが明らかになっており、日本語教育の現場への応用が期待できるものとなっている。

こうした優れた面を有する本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一は、オノマトペという括り方である。一口にオノマトペと言っても、その捉え方に言語間で微妙な差があり、とくに擬音語と擬態語のバランスは言語によって違いが見られる。本調査ではオノマトペと概括されていたものの、実際にはアニメーションによる擬態語の産出に重点が置かれていたため、擬態語に乏しい中国語話者にとってはより厳しい条件になっていたことが予想される。そのため、アニメーションという映像だけでなく、音声を聞かせた産出などの併用も考慮されてよかったのではないだろうか。

第二は、文体的な特徴への配慮である。調査した語は、筆者自身の名大会話コーパスの調査と、日本語教育におけるオノマトペ習得を論じた三上京子氏の博士論文の調査で抽出された語の重なりを取ったものであるが、前者の資料は典型的な話し言葉であるのに対し、後者の資料の元になったものは書き言葉が中心である。両者の重なりを取る選定方法はバランスがよいという見方もあるが、日常的な言語生活に役立つオノマトペを学習さ

せるという本論文の趣旨から考えると、文体的な特徴についてもより深く吟味して、調査対象となるオノマトペを選定してもよかったのではなかろうか。

第三は、調査協力者の選定である。調査協力者の日本語能力については日本語学習歴で測られており、フェイスシートでその情報が集められているが、フェイスシートだけでなく、J-CAT や SPOT といった試験を併用して日本語力を測っておいたほうが、調査協力者の日本語能力をより正確に把握できたように思われる。また、それぞれの調査対象者のグループに人数の偏りが見られ、実際の調査では、適切な調査協力者をバランスよく集めることの困難は理解するものの、そのバランスがよければ、調査結果の信頼性がより増したように思われる。

しかし、これらの問題点については、調査に対する筆者の立場から必然的に導かれた面もあり、本論文の示す独創的な学術的成果の価値を損なうものではないと思われる。また、こうした問題点については筆者自身にも自覚があり、筆者の今後の研究のなかでさらに改善が期待できるものであると考えられる。

4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、筆者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
山崎 誠
五味 政信

2018年5月18日、学位請求論文提出者、NGUYEN THI THANH THUY 氏の論文「日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究—ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、NGUYEN THI THANH THUY 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、NGUYEN THI THANH THUY 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。